

手取扇状地における飛鳥時代の移民集落

小松市教育委員会 望月 精司

1 手取扇状地の古代集落成立と土地開発

(1) 北加賀の伝統的集落域と手取扇状地

日本の米作り文化は弥生時代に大陸から水田農耕技術が伝来したことに始まる。これにより、人々は河川流域の低地に村を作り、定住生活を行うようになる。北加賀では犀川流域、浅野川流域の沖積平野である、金沢平野がその舞台で、金石・藤江・畝田地区の遺跡群、戸水・大友地区の遺跡群、千木地区の遺跡群など、地域の中核をなす平地集落が営まれた。弥生時代以降、古墳時代、飛鳥時代へと伝統的に水田経営を行いながら営まれる集落域であり、これを伝統的集落域と呼ぶ。南加賀の伝統的集落域は、北部が梯川、鍋谷川流域の能美平野、南部が動橋川、八日市川、大聖寺川流域の江沼盆地であり、その後背地の里山には能美古墳群、江沼古墳群など、伝統的集落域を本拠とする在地首長層の墓域が展開した。

手取扇状地でも扇状地下流域にあたる安原、相川、法仏の各地区においては、弥生時代以来の水田経営を行う集落が営まれた。ただ、その規模は伝統的集落域に比べて小さく、単発的であり、扇状地中流域、上流域にいたっては、継続的に集落を営む様相は確認されない。つまり、弥生時代から古墳時代まで未開の地と呼べる地域であった訳で、それは水田農耕に適さない荒れた土地条件が要因にあったろう。古墳時代前半までの農耕技術では水田経営が困難であった地であり、以下で述べる農業技術の進展によってはじめて、農業経営を可能とした地であったと言えるだろう。

(2) 飛鳥時代の先進的農業技術の導入と扇状地開発

国内における農業技術の進展とそれに伴う水田区画の拡大は奈良平安時代になって実現するが、その技術導入は古く、古墳時代中期頃に朝鮮半島から鉄製農具製作技術（U字形地鋤先・鋤先）や牛馬耕法（馬鋤・唐鋤）、灌漑施設等の高い土木技術が導入されたことに端を発している。ただ、当時は畿内を初めとして西日本の一部に先進的に導入されたただけであり、広く日本に普及することはなかった。

最近、富山県氷見市稲積川口遺跡で飛鳥時代前半に位置付けられる馬鋤が発見された。歯の部分の木製のほぼ完形品で、北陸東部としては先進的に導入された農耕具であったと言えよう。このような牛馬耕を示す資料や鉄製農具の出土はなかなか一般の集落からは確認されないが、北陸西部では7世紀前半には江沼丘陵に営まれる南加賀製鉄遺跡群や金津丘陵に営まれる金津製鉄遺跡群が成立していると考えられ、鉄製農具普及の下地は十分に形成されていたものと考えられる。

これら飛鳥時代以降の先進的農業技術の導入は、従来の沖積地での農耕にも活用されたであろうが、これまで未開の地であった扇状地での農地開拓や農業経営に大きな効力を発揮したであろう。それを示すように、越前地域では飛鳥時代に成立する大規模な集落遺跡が、後に国府の営まれる武生盆地の山麓扇状地上（高森遺跡）に営まれたり、古墳時代後期に越前の中核地域であった坂井平野を望む後背丘陵地の扇状地上（乗兼・坪江遺跡）に営まれるなど、地域（郡レベル）の中核となる平野に付随する形で成立してくる。これはその地域の経済力向上を求めて、これまで未開の地であった扇状地などに農地拡大を図ったものと言えるが、今回取り上げる手取扇状地の開発集落は、北陸西部の中では最大規模の農地開発であったと言えるものである。

(3) 手取扇状地の新規開発型集落

手取扇状地下流域は、弥生時代から古墳時代と断続的に小規模な集落遺跡が営まれる地であったと述べたが、飛鳥時代前半になると、これ以降、奈良・平安時代へと継続的に営まれる集落が成立してくる。北安田北遺跡や相川遺跡群、米永古屋敷遺跡などがそうで、扇状地下流域でも南西部に主に分布することと、飛鳥時代前半から集落が営まれることを特徴とする。

手取扇状地下流域の集落が飛鳥時代前半に出現するのに対し、中流域に営まれる末松遺跡群や三浦遺跡、新庄地区の遺跡群は、飛鳥時代中頃から後半に若干遅れて出現してくるのが特徴である。中流域は末松廃寺を中核に置くかのように、寺院周辺に営まれる傾向があり、下流域よりも集落群の広がりや密度が高い。

飛鳥時代に成立することと飛鳥時代後半に集落拡大傾向を示す点は、越前と同様であり、その様相は南加賀の三湖台地に営まれる三湖台地集落遺跡群とも合致する。以上の飛鳥時代における新規開発型集落経営の様相は、北陸東部には認め難い様相であり、越中から越後においては飛鳥時代終末から奈良時代前半がその時期に相当する。

以上述べた、扇状地に営まれる新規開発型集落は、どのような人々によって営まれていたのであろうか。それは在地の人々であったのか、または他から移配された人々であったのか。そして、この時期の大規模な土地開発はどこが主導したものか。地元主導なのか、中央政府が政策的に行ったものなのか。以下で検討したい。

2 手取扇状地の古代集落構成員を探る

(1) 飛鳥時代における北陸西部地域の集落激増現象

北加賀の伝統的集落域は金沢平野に営まれることは先述したが、手取扇状地に新規開発型の集落が営まれる飛鳥時代になっても、地区内での集落移動などをしながらも継続的に営まれ続ける。そのような中で新規集落が手取扇状地に展開し、集落数が激増していくわけであり、そこには当然、他地域からの移民があったことが予測される。

扇状地開発には鉄製農具生産を行う製鉄・鍛冶技術、大規模面積を開墾するための牛馬耕技術、それに付随する牛馬の飼育、そして新たな灌漑施設を整備するための土木技術など、先進的な農業技術が必要であったわけだが、扇状地中流域でも上流域に近い、新庄地区の上林新庄遺跡では飛鳥時代後半以降、複数の鍛冶遺構を営む。ただし、その生産規模は決して大きくはなく、専門的な鍛冶工房を構える鍛冶集落を形成していたとは考え難い。出土する鍛冶滓の量等から見て、手取扇状地の新規開発集落における鉄製農具生産や再加工、修復などを一手に引き受ける程度の手取扇状地の農地開発に付随した鍛冶場であったものと理解したい。

(2) 移民の存在を示す要件

遺跡資料から移民の存在を探る方法としては、生活に密着した遺物、遺構資料に関し在地のものとは異なるかを検証する方法が有効である。特に、日常的な生活用具である煮炊き用土器（煮炊具）は基本的に容器の商品価値から見て流通対象とはなりにくく、内容物を運搬する容器としても適さないため、他地域で一般的に使用される煮炊具が一つの集落遺跡や一つの領域の集落遺跡でまとまって出土する場合は、移民たちが集団移住した根拠になるとされている。それは煮炊具自体が集落域内での生産により確保される性格を持つためであり、集落員の多くが移民であった場合は、伝統的に作られ続けてきた在地の煮炊具の生産技術の規制を受けにくく、移民たちがもともと住んでいた地域の煮炊具の作り方を踏襲することが多かったためである。

これは住まいや生活環境整備という点でも同様の傾向が読み取れる。日常的な住まいは、地域の風土や気候環境に適した建物形態を伝統的に代々継承して作り続けていくものであり、生活の中で人々にしみ込んだものである。移民たちが集団で住まいを作った場合、故郷の建物建築方法に基づくことは自然のことであり、それが在地の通常住まい形態とは異なる場合は、煮炊具同様に移民の存在を示すこととなる。

このような現象は我々の現代社会においても一般的に見られる現象である。多くは食べ物の嗜好性や味、調理方法、食べ方に象徴的に現れているが、家の間取り空間や建物の材質、住まいの環境整備の考え方も同様に生活に密着する部分で、時代を超えて共通するものと言えるだろう。

(3) 移民たちの煮炊具

① 伝統的集落域の煮炊具と在来型煮炊具

弥生時代に稲作文化が伝来して以降、古墳時代前期までは米を煮て調理する粥調理が行われていたが、古墳時代中期におこった朝鮮半島からの大規模な渡来人移住によって、朝鮮半島で一般的であった米を蒸す調理が日本に導入される。調理方法とともに、先進的な調理施設であるカマドと蒸し調理用具である湯釜と甑が導入され、米を煮る調理具であった鍋は大きさと用途が分化し（小鍋と大鍋）、野菜や雑穀類などを煮たり、ゆでたりするオカズ調理具となる。

以上の調理具や調理方法の変化は、畿内周辺にまず導入され、半世紀の後には全国各地へ波及する様相を見せる。北陸西部の煮炊具も、古墳時代後期にはほぼ器形や器種、製作技法が定着し、口縁部外反器形で、胴部が張り、丸底を呈す器形となる。外面はハケ目調整、内面はケズリ調整を基本とするもので、これら北陸西部に広く確認される伝統的な煮炊具を「在来型煮炊具」と呼ぶ。金沢平野などの伝統的集落域で出土する煮炊具はほとんどが在来型煮炊具であり、これは能美平野と江沼盆地に営まれる伝統的集落域でも同様の現象が確認されている。つまり、飛鳥時代においては、伝統的集落域では伝統的な煮炊具作りを継承する様相が見られるわけであり、以下で述べる手取扇状地の集落遺跡で出土する煮炊具とは大きく様相を違える。

② 手取扇状地から出土する移民系煮炊具の故地

手取扇状地の新規開発型集落から出土する煮炊具は周辺集落から供給を受けたか、集落内に定数存在したであろう在地民の製作による「在来型煮炊具」が主体的に存在はするものの、朝鮮半島の軟質土器や丹波地域を故地とする煮炊具、近江地域を故地とする煮炊具など、移民系煮炊具が3～5割の高率を占める。ここで移民系煮炊具の特徴を簡単にまとめると以下の通りとなる。

朝鮮系煮炊具は朝鮮半島で出土する軟質土器をその原型とするもので、釜の長胴器形と小鍋の平底器形、甑の底部形態、胴部叩き成形技法とロクロ回転を使用した引き出し技法、カキ目調整がその特徴として上げられる。

丹波系煮炊具は京都府綾部市周辺に分布する「青野型」と呼ばれる特徴的な煮炊具を原型とするもので、釜の球胴器形、口縁部内面のロクロヒダ状の段形成、意識的に赤く発色させる胎土調製技法などが特徴として上げられる。丹波では、綾部市周辺を本貫地として由良川流域、若狭まで広く分布する傾向があり、その領域程度を丹波系煮炊具の故地と位置付ける。

近江系煮炊具は、近江地域を中心に山城地域など畿内北部にまで広く分布する煮炊具を原型とするもので、釜の長胴器形と受口器形を特徴とする。ただ、地域によって若干口縁部の受口形態や胴部調整技法が異なっており、手取扇状地のものと共通する煮炊具は外面下半のケズリ調整と受口器形の形態から、湖北や湖西地方の煮炊具が最も近いと判断され、当地の近江系煮炊具の故地と判断する。

(4) 移民系煮炊具の分布の偏り

手取扇状地の新規開発型集落は下流域と中流域とで、成立時期に違いがあると述べたが、それは移民系煮炊具の故地においても同じ領域の中での対比でまとまる傾向が見られる。つまり、扇状地下流域の北安田北遺跡や相川遺跡群などは、丹波系煮炊具が目立って出土する傾向があり、扇状地中流域の末松遺跡群や三浦遺跡、新庄遺跡群では近江系煮炊具が目立つ傾向がある。凡その数値割合ではあるが、扇状地下流域では在来型7に対し丹波系3で（朝鮮系と近江系はあわせても1割未満の僅少）、扇状地中流域では在来型5、近江系4、丹波系1（朝鮮系は1割に満たない僅少）というデータが得られており、下流域と中流域で移民系煮炊具の主体が丹波系と近江系とで明確に別れていた可能性をもつ。

これに集落成立時期がずれることを重ね合わせ、想像をたくましくすれば、第一次開拓集落は、開拓のしやすい扇状地下流域を対象として、在地の集落民と丹波～若狭地域の伝統的に海伝いで交流のある地域からの移民により7世紀前半に形成し、第二次開拓集落は、これまで全くと言っていいほど未開の地であった扇状地中流域を対象として、当地とは交流が盛んであったとは言いにくい近江地域特に湖西・湖北からの移民を主に7世紀後半に集落形成したものと言え、第二次開拓集落は、集落内に専門的な鉄製農具生産者の確保を行うことで、本格的な農地開発に乗り出したものと性格付けられよう。

ただ、移民系土器の割合を見ると分かるように、在来型が主体であることと、どちらかの移民系煮炊具に完全に別れることがないことなど、移民系煮炊具の存在がどれだけ、移民の故地を正確に伝えているのか疑問視される部分もある。土器は移動するものとの前提で考えれば、もう一つの要素である、竪穴建物構造が移民系煮炊具の故地とどのように符合していくかが重要となる。

(5) 移民集落における竪穴建物の構造

北陸西部地域に造り付けカマドを付設する竪穴建物が出現するのが古墳時代後期でも後半段階になってからであるため、伝統的な竪穴建物構造の形態を提示することは困難ではあるが、それ以前の竪穴建物構造の形態変遷から見て、飛鳥時代前半における伝統的な竪穴建物構造は、正方形竪穴で、4本主柱を均等に配置し、奥の壁の中央にカマドが造り付けられる構造のもので、屋根の垂木が地面に直接架かる伏屋式建物構造が一般的であったと理解される。これに類似する建物構造は、手取扇状地下流域の北安田北遺跡の竪穴建物構造である。正方形竪穴、4本主柱、そして中央にカマドが付設されるものだが、カマド煙道がL字に曲がり片側に伸びる形態で、地山掘り残しで造られるカマド構造は丹波系煮炊具の故地である綾部市青野綾中遺跡群で特徴的に存在する「青野型住居」に類似する。北安田北遺跡の調査事例は良好とは言えず、類似するものは1例にとどまるが、この遺跡で近江地域に共通する竪穴建物が確認されていない点を重視すれば、移民系煮炊具の故地と一致する現象とも捉えられる。

これに対し、手取扇状地中流域の竪穴建物構造は、末松遺跡群をはじめとして、竪穴の壁際に周溝と小柱穴が巡る壁支柱竪穴建物構造という建物壁が直立する特異な竪穴建物構造を有し、4本主柱、造り付けカマドを隅にもつことを特徴とする。近江では湖西の日置前遺跡や湖北の井口・柏原遺跡で壁支柱竪穴建物構造が確認されるており、移民系煮炊具の分布と共通する。ただ、時期が7世紀末から8世紀前半と末松遺跡群のものよりも新しく、その確証を得るためには7世紀中頃までさかのぼる資料の発見が待たれる。

(6) 手取扇状地開発の担い手たち

以上のように見ると、移民系煮炊具の故地とその故地に分布する竪穴建物構造とが概ね符合するように見えるが、丹波特有の「青野型住居」も実は造り付けカマドが「L」字に曲がる構造から、朝鮮半島

に故地をもつオンドル型カマド付竪穴建物がその原型である可能性が高い。近江地域に故地を求めている壁支柱竪穴建物構造についても、小松市額見町遺跡ぬかみまちにおけるオンドル型カマド付き竪穴建物構造が7世紀後葉になって壁支柱竪穴建物に変化している点と朝鮮半島でも確認例があるとの情報から、朝鮮半島にその故地を求めえる可能性が高く、7世紀代に特徴的に北陸西部に出現する新たな竪穴建物構造は、いずれも朝鮮半島を故地としている可能性を有すこととなる。

また、今回取り上げた国内の移民系煮炊具である丹波系煮炊具にしても、6世紀後葉に青野型住居を有する集落の成立とともに出現してくる傾向があり、口縁部内面のロクロヒダ状の強いナデはロクロ技法による可能性も指摘されているなど、朝鮮半島系技術をもとに出現した可能性を有している。近江系煮炊具についても、その器形が定型化するのには6世紀後葉であり、特徴的な釜の長胴器形は、朝鮮系との繋がりも想起させる。これら移民系煮炊具の成立が朝鮮半島に直接的に結びつくものではないが、新規開発型集落の成立時期や新たな竪穴建物構造の導入、新規形態の煮炊具成立を関連させて考えれば、朝鮮半島からの移民がそれに関わっていた可能性は十分にある。

以上の視点で手取扇状地に移配された人々を考えると、丹波でも近江でも、もともとの伝統的な集落民を北陸西部へ移配したのではなく、6世紀後葉に畿内北東部に成立させた新規開発型の集落構成員を、二次的に移配した様子が読み取れよう。それが朝鮮半島からの渡来人を主体とした移民であったとはい切れないが、畿内北東部の新規集落形成において、農地開発を先導するだけの技術力を有し、集落内の構成員を統制管理するための文書作成しきじのうりよくの識字能力を有した人間は必要であり、つまりは渡来系移民が先導的な立場で加わっていた確率は高かったと言えよう。彼ら渡来人は初期律令政治の根幹こんかんを成す戸籍・計帳せきけいちょうの作成・管理と、農地開発等の経済基盤形成に重要な役割を担っていたものであり、その渡来系二世を含む集団を核に北陸西部の新規土地開拓は進められたと見ることも十分可能と言えらる。

3 飛鳥時代の移民集落とその目的

(1) 南加賀の移民集落と手工業生産

南加賀地域には農地開発を主目的とする扇状地開発集落は確認できないが、加賀三湖かがさんこに囲まれた三湖台地さんこだいに、飛鳥時代の始まりとともに新たな形で集落遺跡が面的な広がりをもって成立してくる。当地は弥生時代、古墳時代と主要な集落域となっていない未開の地であり、集落成立時の竪穴建物構造の約9割が朝鮮系竪穴建物構造と言われるオンドル型カマド付竪穴建物である点から、朝鮮半島からの渡来一世を軸に集落形成がなされたものと理解されている。

当集落成立と同時期、三湖台地集落群から湯を挟んだ対岸丘陵地には製鉄遺跡群そうぎょうが操業を開始する。5世紀末に既に稼働を始めている製陶遺跡群もこの時期に再編され、生産規模の著しい拡大が図られており、ここに北陸でも最大規模を有す南加賀製陶・製鉄遺跡群が誕生する。三湖台地集落群は当製陶・製鉄遺跡群の成立と深い関係にある集落と位置付けでき、それは当集落群内に見られる朝鮮系煮炊具生産が後に丘陵部での土師器生産へと移行し、北陸型煮炊具成立の原点となること、丘陵部の製陶遺跡群で使用される窯道具が当集落群内で出土すること（製品出荷時の廃棄品）、丘陵部で製錬された鉄素材を当集落群内に持ち込み、盛んに精錬せいれん、製品加工を行っていること、製糸業に伴うと判断される紡錘車ぼうすいしゃが多く出土することなどから窺い知ることができる。三湖台地の朝鮮系移民は丘陵部手工業生産に従事する技術者としての位置付けがなされるものであり、丘陵部手工業生産遺跡群の工人集落と製品加工や出荷・流通、他の副業的手工業生産を兼ねた集落と性格付けられよう。当台地集落群は、後に江沼郡八田郷えぬまぐんや（里）、額田郷ぬかたごう（里）として支配管理される地であり、その名称から集落成立段階では矢田部、額田部の部民集落としての位置付けがなされたものと理解される。

この三湖台地集落群の南方には江沼地域の伝統的集落域である江沼盆地が広がるが、評制施行間も

ない7世紀中頃には、この地に江沼評（与野評）が設置されたと見られ、評設置の前提となる中央主導型の経済基盤形成事業として、三湖台地の部民集落と丘陵部の基幹の手工業生産が置かれたものと考えられるだろう。

（2）北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落設置目的

以上の丘陵部手工業生産と連動する形で営まれる台地集落は越前の金津丘陵においても確認でき、大規模な製陶・製鉄遺跡群の成立にはこのような新規集落が付随して営まれる傾向が強かったものと言える。朝鮮半島からの渡来人一世を軸として形成された殖産興業政策であり、そこには中央政府の意図が色濃く反映されていたものと理解されよう。

これに対し、扇状地開発などの新規農地開拓集落は、集落民の一部が先進的な幾種類かの農業技術を有す技術者や戸籍・計帳の作成・管理を行うだけの識字能力を有す者であればよかつたわけで、多くの集落構成員は一般の農業従事者であっても問題はなかつたわけである。つまり、寄せ集めの労働力編成でも可能であった訳だが、在地の中で新規の労働力を動員する絶対数には不足している。では、他地域からの人の移配を主として集落を形成するという前提に立てば、集落内の統制を強め、効率的な生産を上げるためにも他地域から集団で移配させる方法が効果的であったと言えよう。それが手取扇状地における移民系煮炊具の分布の偏りや竪穴建物構造に現れているものと理解している。

それでは、これら扇状地開発に伴う集団移民政策は誰が主導したものなのだろうか。移配を受ける近江や丹波と北加賀との地域間交流の密度から考えて、大規模な集団移民による農地開発は、地域間交流に基づく首長間協力体制において成しえたとは考え難く、北加賀の在地首長層の政治力で単独で行うこともその政策的規模から見て、到底適わない事業であったろう。そこには中央政府が主導的な立場で関わっていたものと見るのが当然である。

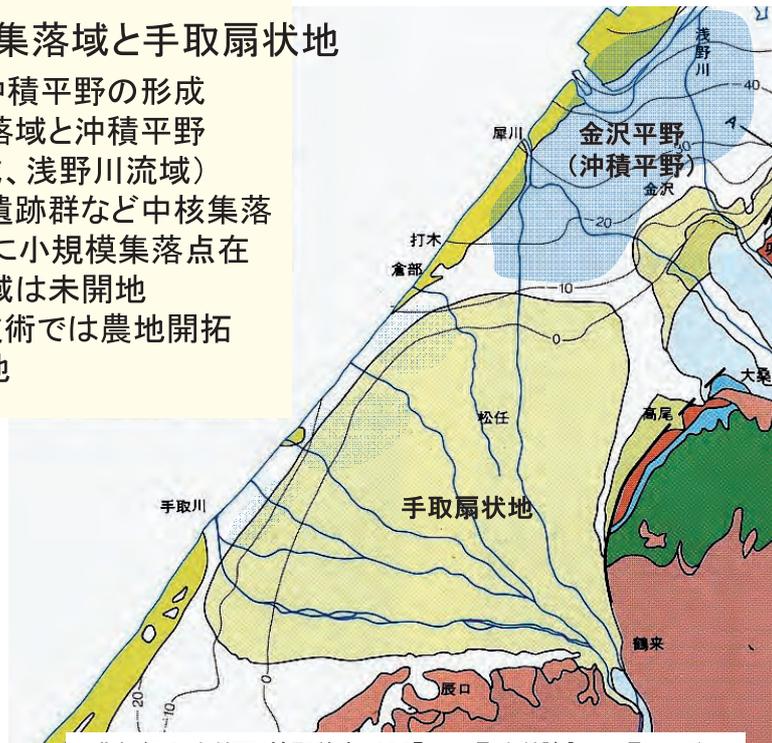
例は極端だが、東北の蝦夷支配政策における城柵設置の前進となる移民集落が飛鳥時代に成立してくることと共通する。東北支配経営においては武力交渉が大きな比重を占め、政策的に同格に位置付けられるものではないが、飛鳥時代に関東系移民の集団移住を軸に新規開発型の集落を複数成立させていく様子は、中央政府が地域支配のために経済的基盤をまず形成していくといった政策手法的な共通性を読み取ることができる。そこには初期律令政府が地方支配政策を円滑に行うために、対抗勢力に対峙するための経済基盤を形成することに第1義を置くといった政治的意図が感じられないだろうか。同時に土地と人民とを支配管理するための布石が置くための地方支配策であり、ある程度の広い領域を対象に、各在地首長層の経済基盤となる地を避けながら、点的に移植され、その管理に在地首長層を登用することで、武力的な衝突もなく、円滑に中央政府の官僚機構の中に取り込んでいったものなのだろう。

北陸西部の飛鳥時代の移民政策は、その後、8世紀には北陸東部、そして内陸部へと段階的に進み、そこには北陸西部で形成された移民集団が順次送り込まれたものと考えられる。その地における移民系煮炊具は加賀南部を基点に成立した北陸型煮炊具を原型とする北陸系煮炊具であり、8世紀後葉段階には北陸東部においても在地の煮炊具として、定着、定型化されていくのである。

1. 手取扇状地の古代集落成立と土地開発

(1) 北加賀の伝統的集落域と手取扇状地

- ①水田経営の開始と沖積平野の形成
- ②北加賀の伝統的集落域と沖積平野
 - ・金沢平野(犀川流域、浅野川流域)
 - 戸水遺跡群、畝田遺跡群など中核集落
 - ・手取扇状地下流域に小規模集落点在
- ③手取扇状地中上流域は未開地
=古墳時代の耕作技術では農地開拓が困難であった土地



北加賀の地質図(糸野義夫1992『石川県地質誌』石川県による)

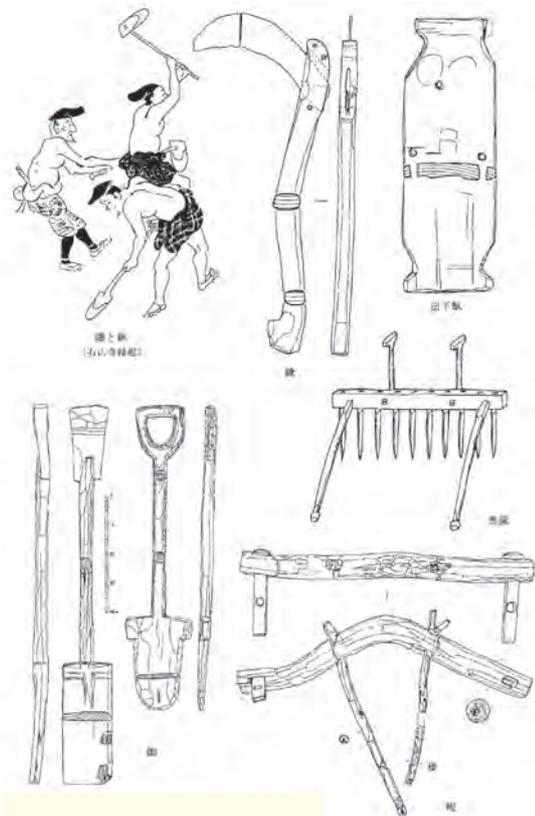
(2) 飛鳥時代の先進的農業技術の導入と扇状地開発

- ①国内の先進的農業技術導入
朝鮮半島系技術を古墳時代中期導入
- ②北陸の飛鳥時代以降の変化
・氷見市稻積川口遺跡で馬鋤出土



飛鳥時代前半期

- ・飛鳥時代に北陸西部で南加賀や金津の製鉄遺跡群が成立
- ・飛鳥時代以降に越前で扇状地帯で新規開発型集落が成立



古代の農具(『考古学による日本歴史2』雄山閣による)

(3) 手取扇状地の 新規開発型集落

- ①扇状地下流域集落
=7世紀前半成立
・北安田北遺跡
・相川遺跡群
- ②扇状地中流域集落
=7世紀後半成立
・末松遺跡群
・三浦遺跡
・新庄遺跡群
- ③飛鳥時代前半に成立し、
後半に拡大様相をもつ
南加賀や越前も共通する
※新規開発型集落
の担い手は誰か？
a) 集落構成員は誰？
b) 在地首長主導か？
中央政府の政策か？



手取扇状地の伝統的集落と7世紀成立集落(望月作図)

2. 手取扇状地の古代集落構成員を探る

(1) 飛鳥時代における北陸西部地域の集落激増現象

- ①伝統的集落域=在地主導の中核集落=飛鳥~平安期継続
- ②新規開発型集落=在地民では賄えない⇒他地域からの移民を示唆
 ↳扇状地開発能力(灌漑施設、鍛冶、牛馬耕、飼育)を有す開拓移民
 上林新庄遺跡の鍛冶遺構検出=農具生産と修復を担当する鍛冶場

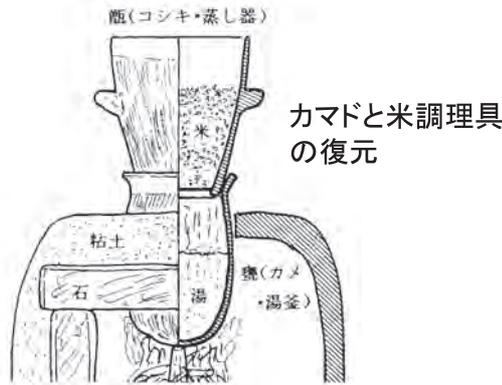
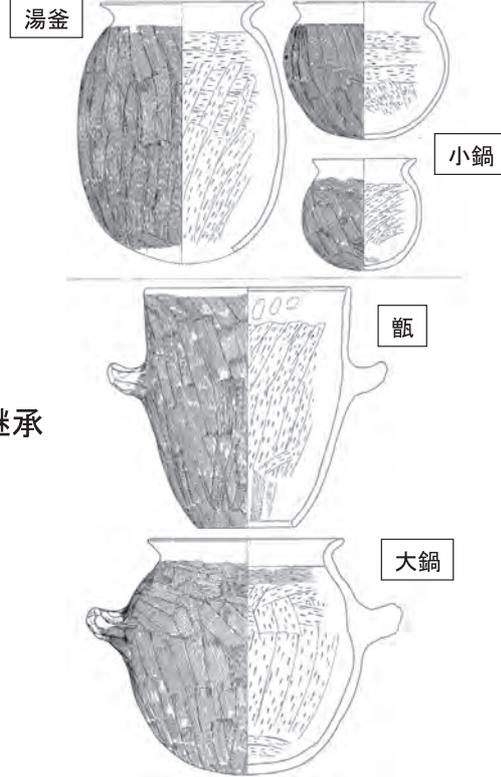
(2) 移民の存在を示す要件

- ①集落出土の日常煮炊具が在地の通常形態(在来型煮炊具)と異なる
 煮炊具は流通しない土器であり、内容物運搬にも適さない
 ⇒他地域系統煮炊具の大量出土は移民たちの製作とするのが定石
 - ②集落内の竪穴建物構造が在地の通常形態(4本主柱中央カマド)と異なる
 地域に適した建物形態を伝統的に代々継承して作り続けていくのが通有
 ⇒他地域系統の建物は移民の手による建物建築を示唆する
- ↳人々が守り固執する伝統的な部分は現在も同様
 食物の嗜好や調理方法、調理器具、住まいのあり方

(3) 移民たちの煮炊具

① 伝統的集落域の煮炊具と在来型煮炊具

- ・煮炊具の種類
米調理具＝湯釜＋甑⇒蒸し調理
オカズ調理具＝大鍋と小鍋⇒煮る・茹でる
- ・煮炊具の特徴
口が外反し、胴の張る、丸底器形
外側のハケ目調整と内側のケズリ調整
⇒北陸西部に共通する煮炊具特徴
- ・在来型煮炊具のみを使用する集落
金沢平野の伝統的集落⇒伝統的土器作り継承



御経塚ツカダ遺跡出土の在来型煮炊具

② 手取扇状地から出土する移民系煮炊具の故地

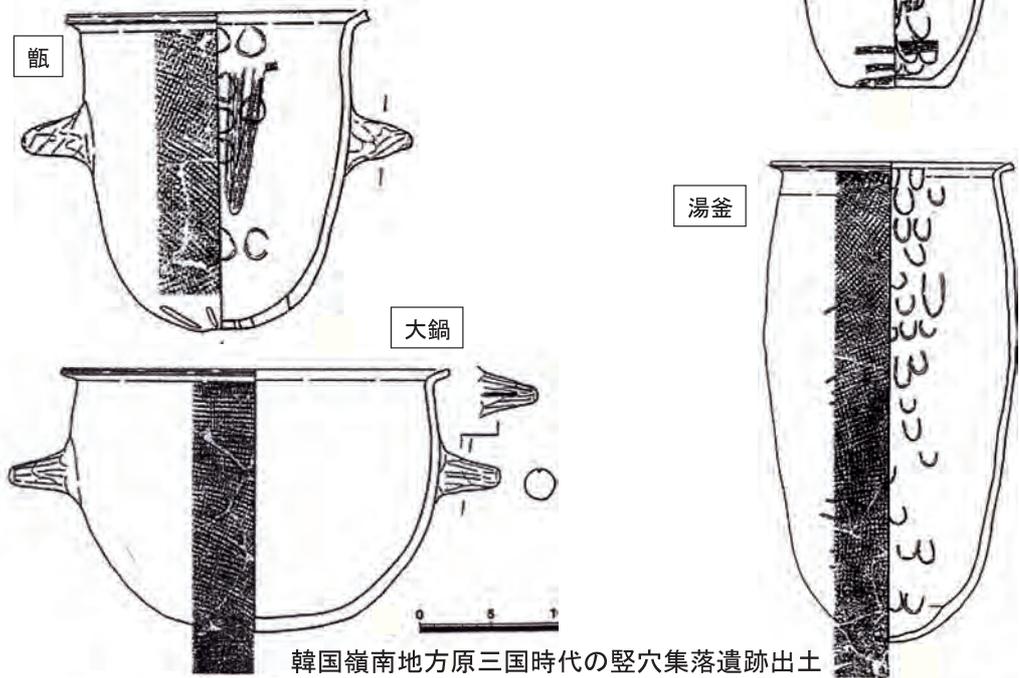
- ・在来型煮炊具主体
ただし、移民系煮炊具3～5割
- ・移民系煮炊具は3種
朝鮮系煮炊具
＝朝鮮系軟質土器原型、
丹波系煮炊具
＝綾部市周辺を故地
近江系煮炊具
＝湖西・湖北を故地



手取扇状地の古代集落出土煮炊具

○朝鮮半島の軟質土器

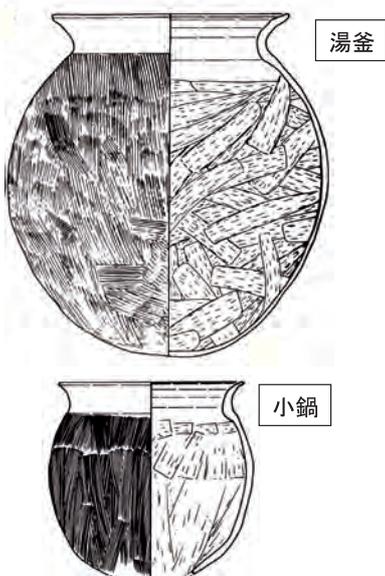
- ・釜の長胴器形と小鍋の平底器形
- ・ロク口引き出し、カキ目調整、叩き成形技法



韓国嶺南地方原三国時代の竪穴集落遺跡出土

○丹波地域(綾部市周辺)の煮炊具

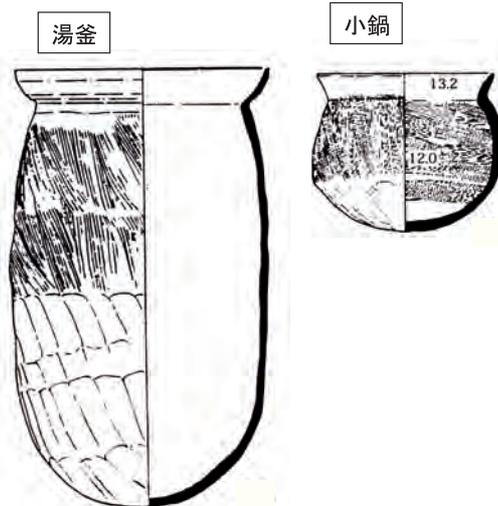
- ・釜や小鍋の球胴形
- ・口内面のヒダ状段形成
- ⇒丹波～若狭に確認される



京都府綾部市青野綾中遺跡群出土
の7世紀前半の煮炊具

○近江地域(湖北地方)の煮炊具

- ・釜の長胴形と受口状器形
- ・外面下半ケスリ調整
- ⇒特に湖北や湖西と類似



滋賀県高月町井口遺跡出土
の7世紀前半の煮炊具

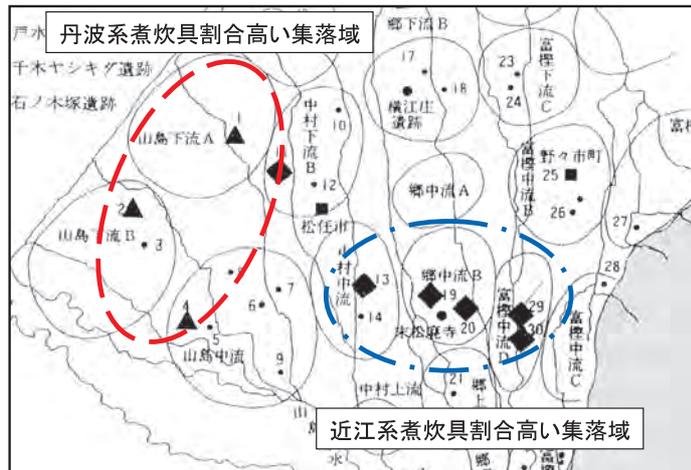
(4) 移民系煮炊具の分布の偏り

① 扇状地下流域集落

- ・北安田北遺跡、相川遺跡群
- ⇒丹波系煮炊具目立つ集落
- 在来型7:丹波系3:朝鮮系・近江系:僅少

② 扇状地中流域集落

- ・末松遺跡群、三浦遺跡、新庄遺跡群
- ⇒近江系煮炊具の目立つ集落
- 在来型5:近江系4:丹波系1



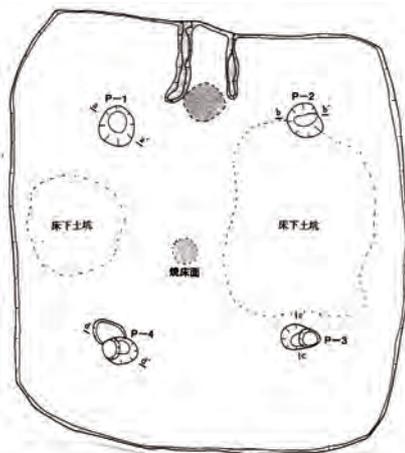
- ☞ 移民系煮炊具 = 移民たちの手による故郷の煮炊具生産
- ⇒ 扇状地下流域は丹波～若狭からの移民を主として7世紀前半に移配
- 扇状地中流域は近江(湖北・湖西)からの移民を主として7世紀後半に移配

- ※ただし、在来型主体的存在と移民系煮炊具の混在は疑問視
- = 土器は移動するものであり、移民本貫地特定には不確定要素含む
- ☞ もう一つの要素 = 竪穴建物構造が移民系煮炊具とどう符合するか?

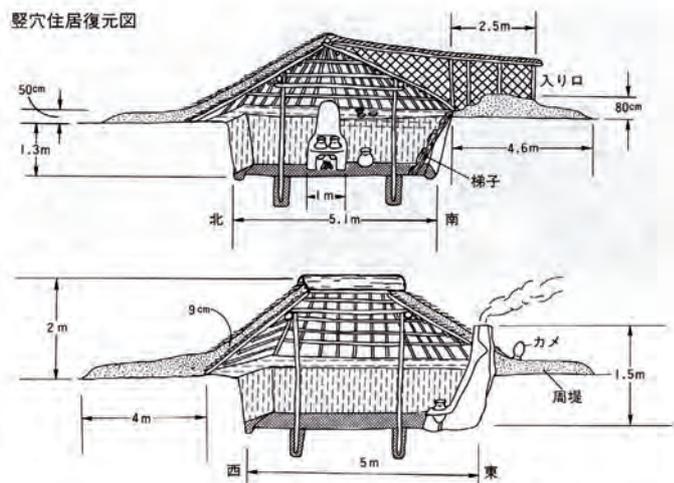
(5) 移民集落における竪穴建物の構造

① 伝統的な竪穴建物構造 = 国内に一般的な竪穴建物構造

- ・正方形竪穴、4本主柱、中央カマド
- ・伏屋式建物構造



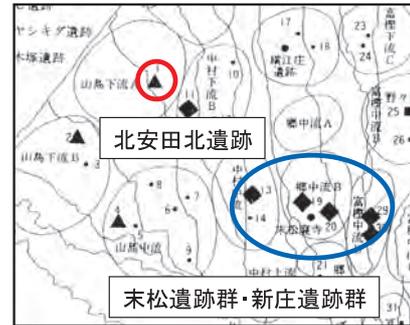
小松市念仏林南遺跡出土
7世紀前半の竪穴建物



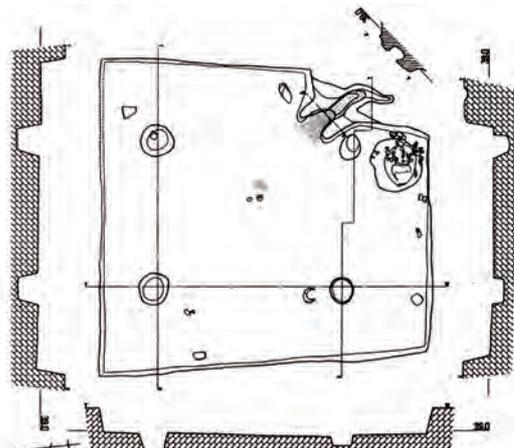
黒井峯遺跡の伏屋式建物の復元図
石井克己他『日本の古代遺跡を掘る4』より

②扇状地下流域の北安田北遺跡と青野型住居

- ・北安田北遺跡の7世紀前半建物
正方形竪穴、4本主柱、L字型掘残しカマド
⇒丹波の青野型住居に類似する
- ・他は小型竪穴で、隅カマドもつもの
近江系の竪穴建物は検出されていない



北安田北遺跡の7世紀前半の竪穴建物



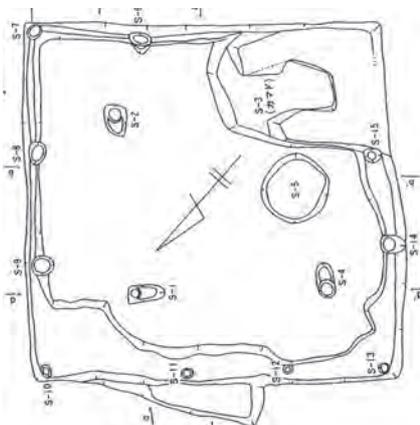
綾部市青野南遺跡の典型的な青野型住居

③扇状地中流域集落: 末松遺跡群など

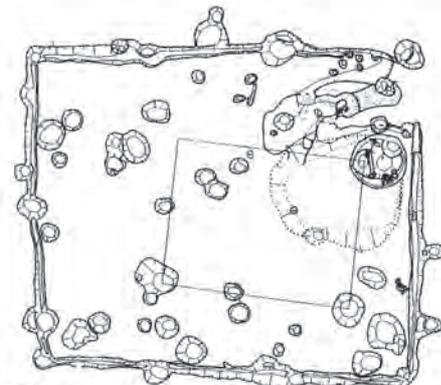
- ・壁支柱竪穴(壁建ち竪穴構造)、
 - ・4本主柱、隅カマド
⇒湖西・湖北の竪穴建物に類似
- ※ただし、末松遺跡群が7世紀中頃に遡るのに
対し、近江のものは7世紀末までのもの
時間的矛盾＝今後の調査例増加次第



壁支柱竪穴建物復元図(宮本長二郎氏作成)



高島市日置前遺跡の8世紀前葉の壁支柱竪穴建物



末松A遺跡の7世紀末の壁支柱竪穴建物

(6) 手取扇状地開発の担い手たち

① 青野型住居、壁支柱竪穴構造の原型

- ・青野型住居はオンドル型カマド付竪穴建物に類似⇒朝鮮系竪穴建物に原型？
- ・壁支柱竪穴は額見町遺跡でオンドル型カマド付設竪穴から変化する
⇒朝鮮半島にも確認例あり = 朝鮮系建物が原型？

② 移民系煮炊具のももとのルーツ

- 丹波系・近江系煮炊具
- = 6世紀後葉出現の新型煮炊具
- 丹波系⇒口内面段はロクロヒダ状
・・・朝鮮系技法との関連性も？
- 近江系⇒釜の全体器形が長胴形
・・・朝鮮系釜器形に由来する

☞ 移民系煮炊具も原点は
朝鮮系煮炊具にある可能性

- ### ③ 手取扇状地に移配された人々
- ⇒ 丹波、近江の新規開拓型集落民
 - 渡来系移民を含む可能性大きい
 - = 技術者かつ識字層
 - ⇒ 戸籍・計帳管理と農地開発に必要な技術と知識を保有



近畿北東部の煮炊具分布と竪穴建物の分布域

3. 飛鳥時代の移民集落とその目的

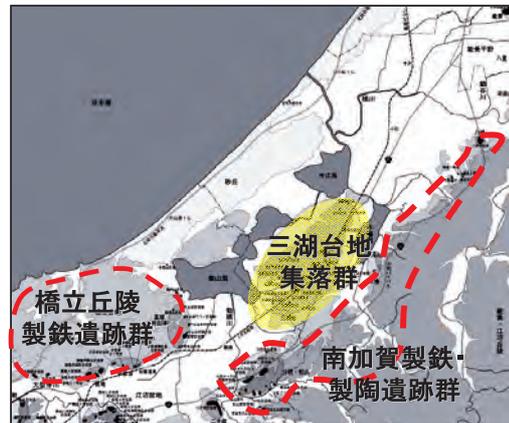
(1) 南加賀の移民集落と手工業生産

① 南加賀の三湖台地集落群

- ・7世紀前半に突如出現する台地集落
- ・集落成立時の竪穴建物9割が
渡来系竪穴建物(オンドル型カマド付竪穴)
- ⇒朝鮮系移民軸に集落編成



額見町遺跡と韓国の
オンドル型カマド付竪穴建物



三湖台集落群と丘陵部手工業生産遺跡群

② 朝鮮系移民の役割

- ・製鉄製陶遺跡群と一体的経営
- ・集落内部での手工業生産
- ・丘陵部製品の加工・出荷センター
- ⇒ 渡来系移民は手工業生産技術者



オンドル型カマドと通常のカマド

③三湖台地集落群の性格と経営目的

- ・三湖台地集落遺跡群は丘陵部工人の母体集落兼手工業センター
- ・矢田部、額田部の部民集落として成立⇒中央直轄地的性格
- ☞7世紀中頃の江沼評設置の前提となる中央主導型経済基盤形成事業

(2)北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落設置目的

①三湖台地集落群を軸として大規模手工業生産政策

⇒渡来系1世を軸として中央主導型の殖産興業政策

②扇状地開発型集落の在り方は？

- ・扇状地開発民は一部の先進的技術者と識字能力者を含む農耕集団
- ⇒主体を占める農業従事者は寄せ集めでも可能
- ただし、集団移民前提なら、管理統制、効率の面から集団移住が効果的
- ☞移民系煮炊具と建物構造のまとまりはそれを示す可能性あり

③扇状地開発型集落経営の主導者は？

- ・北加賀と移民元との交流関係や事業規模の大きさから在地主導型は困難
- ⇒中央主導型と見るのが妥当
- ・東北蝦夷支配政策における移民集落形成のあり方に類似点
- 関東系土師器と竪穴建物、文献記載事例＝関東系移民による集落形成
- 移民は城柵以前に設置⇒行政本体設置前に経済的基盤形成が目的

④移民集落設置による中央政府のねらい

- ・評制施行の前段の経済基盤形成と人民と土地を基本とした地方支配政策

【参考文献】

- 熊谷公男 2009 「律令国家成立期における柵戸と関東系土師器」『古代社会と地域間交流—土師器からみた関東と東北の様相—』国土舘大学考古学会
- 田嶋明人 1996 「手取扇状地にみる古代遺跡の動態」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』松任市教育委員会
- 望月精司 2000 「小松市額見町遺跡の調査—北陸の古代村落と渡来人の役割—」『日本歴史』第621号 吉川弘文館
- 望月精司 2007 「北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落—移民系煮炊具と竪穴建物構造、集落経営の視点から—」『日本考古学』第23号日本考古学協会
- 横山貴広 2003 「扇状地における新興開発領主層の台頭とその後の展開」『蟹気楼—秋山進午先生古希記念—』
- 吉岡康暢 2009 「末松廃寺をめぐる問題」『史跡 末松廃寺跡』文化庁